

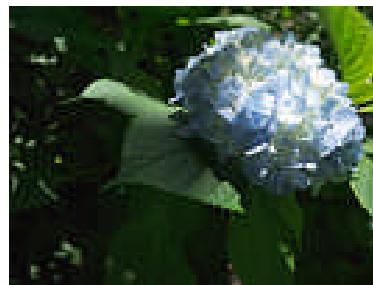
ハードルを越えて

そぼ降る雨に鮮やかな色彩が滲み出すように咲いていた紫陽花が、照りつける強い日差しの中で、梅雨の終わりを予期するようにぽかんと大輪の花を揺らしている。

新しい年度が始まってから4か月が過ぎ、季節は夏になった。1年生、2年生、3年生という個々の学年の特性をもちながら、時間は本高生一人一人に別々の速度と違った長さ、異なった重さを残しながら流れた。それぞれに流れた時間の重たさや意味は、当事者でなければわからないものだろう。

この4か月の中でも、様々な出来事が起きたはずだ。部活や勉強、友人関係や家庭の問題で悩んだこともあるだろう。どんな人間も様々な悩みや困難を抱えて生活している。大きな困難に直面したときに、私たちは「何で自分だけが…」と考えがちだ。

人は生まれ、乳を与えられ、言葉と思考を獲得し、少年、青年、壮年へと変化する。その過程の所々に、行く手を阻むようにハードルが据え付けられていて、私たちはそれをどのように跳び越えるかに頭を悩ませ、時にはなぜこの場所に設置されているのか了解できずに煩悶することもある。



乳児にとって、例えば家族を失うことは、不適切に設置されたハードルであり、彼はヨチヨチとその下をくぐり抜けるだけだろう。ハードルは設置され、もしくはア・プリオリに存在し、私たちはそれぞれのコースのただ一人の走者として、その障害を越えていかななくてはならないのだ。全身全霊で跳び越えていけば、その都度に助走の仕方やフォームに改善点を見いだしながら、より高く、より早く跳び越す術を獲得できる。私たちはハードルを跳び越えるたびに強靭さを獲得し、ハードルはそのためにこそ、存在する。

ハードルと向き合い、跳び越すまでの時間は重たく、辛い時間であるかも知れない。しかし、他の誰でもないあなたにしかそれは生きることのできない時間であり、あなただけが受け止めることの出来る体験である。その体験は他の誰もあなたの代わりに体験することのない、あなたにのみ与えられた一回性の経験なのである。

本高生よ、決してスマートに跳ぶ必要はない。スピードを競って跳ぶこともない。ゆっくりと、確実に一つ一つのハードルを跳び越えることだ。